

TAT の心理療法的意義に対する試案

札幌学院大学大学院 臨床心理学研究科修士課程 石 原 由 宇

要 約

本稿では、TAT (Thematic Apperception Test) の心理療法的意義に対して一つの考察を試みた。TAT の心理療法的意義については、TAT の創始者の一人である Murray が、TAT 使用の目的の一つにかかげる等、TAT 研究の初期から注目されてきた。しかし、TAT の自由な特性上、TAT の心理療法的意義の捉え方も諸々の研究者によって異なり、またその意義についての体系的なレビューも数少ない。そこで筆者は Rosenzweig (1949) の知見を参考に、TAT の心理療法的意義について論じるために、治療者の枠組み、クライアントの枠組み、治療者-クライアント間の相互性の枠組みの3つの枠組みが必要であると論じ、それぞれの枠組みの内実について簡単に記述した。加えて、いかにTAT を心理療法に適用していくかについての問題も論じ、TAT が今後物語を語ることに意義を発見しようとする立場から、物語が「変わって」いくプロセスに沿った適用方法が考案されていくことを提案した。

Key Word : TAT (Thematic Apperception Test), Photo Therapy, 創造性

I. はじめに

本稿では、投映法の代表的技法として広く知られている TAT (Thematic Apperception Test : 主題統覚検査) の心理療法的意義について論じた。TAT がパーソナリティテストとしてクライアントや被検者を心理アセスメントする有効な方法であることは周知の通りであるが、同時に心理療法を促進させる働きを担うものとしてその心理療法的意義について認める者も少なくない (Tomkins, 1948 ; Bellak, 1993 ; 辻 & 高石, 1959 ; 木村, 1964 ; 下山, 1990 ; 鈴木, 2012等)。しかし、一口に心理療法的意義と唱えても、それに対する切り口は多様であり、結果として何をもって心理療法的意義であるのかと説明することは容易ではない。少なくとも、臨床家がそれぞれの実践から丁寧に掘り上げて心理療法的意義を唱えている事実はあれど、体系的に論じていこうとする試みそのものは少ない。筆者はこのような実情に対して、TAT の心理療法的意義を体系的に論じるオリエンテーションを本稿で試みたく思う。

II. TAT とは

TAT は、ロールシャッハ・テストと並び、投映法の代表的なパーソナリティテストと知られている。H. A. Murray と C. D. Morgan を代表とするハーバード心理学クリニックのスタッフらの手によって1930年代にかけて研究がすすめられ、1943年に完成したパーソナリティテストである。ある場面が描かれた絵カードが30枚と空白カード1枚の全31枚の図版から構成されており、被検者は課題として、提示された絵に対して「この絵がどのような場面であるか説明して下さい」という指示に従い物語を作成する。

TAT の実施は、本来の Murray (1943) の提案する施行手続きに従うのであるならば、テストの実施は31枚の中から被検者の性別・年齢に応じて20枚のカードを選定し、1回10カードのセッションを2日に分けてテストが施行される。そして収集されたデータを Murray は自分自身が打ち立てた「人格学 : personology」の見地から、欲求-圧力分析に従い分析・解釈を行う。そして

Murray (1943) は TAT の使用を通じて、「人びとの人格に秘められた欲求、欲動、意味、コンプレックスそして葛藤を探索する」ことが出来ると考えたのである。

以上が一般的に知られている TAT の知識であり、狭義の TAT の説明であるといえよう。しかし今日の TAT の使用は、必ずしも上記のような Murray の立場をとらないことが多い (鈴木, 1997)。TAT 誕生から現在に至るまでの歴史の中で、多くの TAT 研究者や実践家がそれぞれ独自の人格理論あるいは方法論的立場を發展させ、それぞれが異なる分析法や解釈法を使用している。さらには実施法に対しても、使用するカードの種類や枚数の選定にも各自の工夫が行われており、究極的には独自の図版を開発し類似的な検査を開発してしまう者までみられる。

分析・解釈法については、早期の段階からすでに、Bellak (1954), Stein (1955), Henry (1956), Holt (1958) らに代表される研究者が独自のアプローチで TAT を研究しており、日本でも坪内 (1984), 山本 (1992), 鈴木 (1997) らに代表される研究者が独自の分析・解釈法を提案している。

実施法について、20枚の図版が用いられることは少なく、たいていの臨床の現場では使用するカードの種類や枚数をクライアントに合わせて任意に選定し使用されることが多い。

独自の図版については、1943年に Harvard 版 TAT が世に普及されて以降、様々な型の図版が考案された。Bellak の考案した CAT (The Children's Apperception Test) や SAT (The Senior Apperception Technique) は施行する対象者の年齢に応じて修正を加えたものであり、有名であろう。他にも文化差や地域差を考慮して Murray 自身が昆明版、ロシア版、エチオピア版を制作しており (Caroline, Murray, 1999), わが国でも日本版として、早稲田大学版、精神医学研究所版、名古屋大学版等が作成されている。さらには TAT に影響を受け独自のテストとして展開させたものをあげれば、P-F スタディ、PAT (The Tomkins-Horn Picture Arrangement Test), MAPS (Make A Picture Story) 法、Four-Picture テス

ト、コロンブステスト、絵画空想法検査、TEAMS (The-Tell-Me-A-Story-Test) など数をあげれば枚挙にいとまがないことになる。

このように今日では TAT は狭義の説明を越えて非常に多様な仕方で使用されており、TAT をより広義なものとして説明しようとすれば、Gieser・Stein (1999) の「今日、TAT とは個人が絵画についてストーリーを語ることで彼らのパーソナリティを知ろうとする方法を言及する包括的な用語」であるという説明が参考になるかと思われる。また、TAT の創始者の一人である Murray 自身が、以下で述べる TAT の特性故、TAT が「Thematic Apperception Test よりも Thematic Apperception Technique か Thematic Apperception Eductor の方が望ましい」(Murray, 1967) と考えるようになってきていることも、多様に展開を許す要素を含むことを示唆しているように思われる。

以上に示したように TAT は非常に多様で自由なパーソナリティの探求法であると言える。このような自由さは TAT の魅力であり、欠点でもあり得る。TAT が世に普及して70年が過ぎるが、現在に至るまで TAT は統一あるいは標準化された分析・解釈方法を持っていない。この点に対して批判を挙げられよう。また TAT は多様なアプローチが取られるが、アプローチの中には心理測定法的な見地から批判を挙げられる。Eysenck (1968) は「TAT の様なテストは心理測定的基準を満たしておらず、そのためテストと呼ぶに値しない」と批判している。事実、TAT の自由さ・曖昧さは、多くの研究者にこれがテストとして値するか疑問を投げかけるように思われる。また、初期の TAT 研究の発展に大きく貢献した Tomkins においても厳密な意味で TAT が「〈テスト〉と呼ぶことが適当かどうか疑問である」(Tomkins, 1957) という声が投げかけられているのは印象深い。

厳密さに欠けるとして批判を受けてきた TAT ではあるが、他方で広く臨床の現場で TAT が今日に至るまで世界中から広く使用されているのも事実である。それは臨床の現場で TAT が有効な手段として機能しうることを示す。また、逆説的

に臨床の場において有効な手段足りえるからこそ TAT が今日に至るまで世界中で広く使用され続けているとも言えるであろう。先に記述した Tomkins (1957) においても、彼は TAT が「豊富な材料を持っている点において、自由連想法に匹敵する 1 つの方法である」とし、「TAT が経験をつんだ臨床家に診断性材料を提供する」ことを認めている。

TAT が非常に多様で自由な検査であることは、課題がもたらしてくれるデータの質に由来する。Wyatt (1947) が TAT 反応は「ほとんどが構造化されておらず、また捉えどころもない表現形式」であり、「他方、TAT が提供してくれる、生の、具体的データの豊かさ——ロールシャッハ・テストのほっそりとした構造に比べ——のために、検査者は短時間の集中的な「自由」解釈で把握できるものの中から自分の解釈をかき集めようとし、もっとシステムティックな処理は、研究という特別な動機が生ずるまで先送りにしてしまう」ものであると述べている。Wyatt が示した、TAT のデータがもたらす「生の、具体的データの豊かさ」は TAT が他のテストに比べて優るとも劣らない魅力の一つであり、そしてこの点を多くの TAT 実践家・研究者が認めている。そして同時に、他のテストで採用されている記号化などを含むシステムティックな分析方法が、たくさんの具体的に固有な意味を取りこぼしてしまうことも認めるのである。鈴木 (1997) や海本 (2005) 等 TAT 研究者の多くが、システムティックなアプローチの重要性を認めているながらも、他方では、TAT においてそのようなアプローチが限定的にしか有効に機能しない現状がある。このような現状を受け止め、彼らは「TAT には「システムティックな分析は馴染まない」ことを容認すべきである」という考える立場にあると言えるであろう。

むしろ TAT では「生の、具体的データの豊かさ」を直接把握すべく、検査者はその解釈に多大な努力が要求される。「生きた」解釈をするために個々人のこれまでの心理学的知見を総動員せねばならないし、またそのための心理学的知見を集めなければいけないだろう。それは結果として非常に個人の臨床家の影響を受けざるを得ない。そ

して個々人がその知識を体系化した結果として、たくさんの多様なアプローチが展開されたのかもしれないと筆者は考える。この実情に対して、Shneidman (1958) は「TAT はあらゆる人々にとって自分の赤ん坊である」とユーモラスに比喻で述べているが、その赤ん坊を自らの臨床的経験や知識によって育て上げなければいけないのである。

TAT がテストとして妥当であるかどうかを追求することは、本研究の目的ではないため、これ以上の言及はしない。しかし、最後に TAT の創始者である Murray が「人格の探求」に心血を注ぎ続けてきた。その TAT という課題が「人間理解」に提供してくれる情報は、意味をわかってとする人間の本来の性向に根付く心のプロセスに深く結び付き、被検者が人やものごとといかにかかわるのかという理解の大きな補助となりうる。この点において先に紹介した Tomkins が TAT が自由連想法に匹敵する一つの方法であると認めるように、TAT は他の観察法に劣らないほど豊かなものを提供してくれることを示しておきたい。

Ⅲ. TAT の心理療法的意義

TAT はパーソナリティの探求法として考案されたが、その自由さ故にさまざまな用途、領域で使われることになる。その主要な使用領域の一つに心理臨床場面があげられるが、Murray (1951) は、臨床領域での TAT の使用の目的に以下の 4 つをあげている。

- (a). 抑圧されている性質と葛藤を明らかにし、またそれに対する抵抗のあり様を捉えること
- (b). 治療的な働きかけをするものとして利用可能であること
- (c). 治療効果の判定手段として用いること
- (d). 精神身体的疾患の探求の道具として用いること

このように、TAT の使用には心理テストとしてクライアントや被検者のパーソナリティや心理力動をアセスメントするのみならず、その目的として心理療法における治療を促進させようとする意味合いも含まれている。Murray 自身は、先に

も触れたように TAT の絵がクライアントのイメージを喚起させるものとして捉えており、自由連想法を活性化させる手段としてこの意義を捉えていた。しかし、TAT の心理療法的意義もまた、前節で示した TAT の発展の歴史をたどるように Murray の主張を越えて、多くの臨床家たちの実践から、すなわち事例を通して得た知見によって、さまざまな視点から唱えられるようになる。

代表的なものとして、Bellak のアプローチが挙げられる。Bellak (1993) は自身の精神力動的アプローチの見地から、TAT の心理療法での使用が、精神分析で長年かけてわかる情報を明かしてくれ、その点で短期精神療法として非常に有効な手段となり得ること。同時に患者に自分自身の反応に対して自由連想を行わせたり、その中で患者の反応と違う反応を呈示し、自我親和的 (ego syntonic) であった自分の見方 (枠組み) を自我異和的 (ego alien) なものにさせるよう働きかけることにより、自分の心に距離を取らせ洞察を深めさせることとして TAT の心理療法的利用の有効性を示している。

Bellak の視点は、TAT の心理療法的利用に大きな活路を開いた一人であると言える。しかし、何を持って心理療法的意義とみなすかという点は非常に複雑であり、Murray や Bellak とは異なる点が心理療法的意義として唱えられていたり、臨床家個人によって強調点が異なる点が見受けられるなど、TAT の心理療法的意義に対してもその説明は多様であり、体系的に論じた研究は少ない。

TAT の心理療法的意義について、体系的に論じた数少ない文献の一つに、Rosenzweig (1949) が挙げられる。彼は、心理療法における TAT の使用がもたらす有効性は以下の三つの枠組みに従うものと考えている。

- (1): セラピストに対して心理力動の探求の道標となる
- (2): セラピストが患者に対し解釈をもたらす
- (3): 物語からの自由連想の結果として、患者が自分自身に解釈をもたらす

Rosenzweig が提供する三つの枠組みは、心理療法的意義を体系的に捉えているように思われる。しかし彼の視点が精神力動的立場に重きが置かれていること、彼よりも正鵠を得る表現が過去の研究の中で見受けられることを考慮し、筆者は彼の三つの枠組みを参考に『治療者・検査者の枠組み』『クライアント・被検査者の枠組み』そして両者の『相互の関係性における枠組み』を設定し以下に論考を試みたい。

- (1): 事例の理解を助ける—治療者・検査者の枠組み
- (2): クライアント・被検査者の自己変容を促す—クライアント・被検査者の枠組み
- (3): 検査者-被検査者のラポールを促進する—相互の関係性における枠組み

(1): 事例の理解を助ける—治療者・検査者の枠組み

これは、治療者が事例の心理的理解を深めようとする時に TAT が発揮しうる有効性である。鈴木 (2000) は、TAT が「治療の進む方向や速度、治療によって達せられる結果について予示してくれる」という意味で、治療を先導してくれる」ということ、加えて「治療過程が相当進んだとき面接で得られた種々さまざまな個人情報を統合的に把握する手助けをしてくれる」ということの2つを挙げており、テストで得られた情報が事例の中で集積された事実あるいは集積されうる事実に対して、「事実の解釈のヒントを与えたり、不確かな解釈をより確実なものにしてくれたりする」点で、「心理臨床への小さくない貢献である」と述べている。これは心理検査全般に認められる素朴な有効性であろう。しかしその中でも TAT がもたらしてくれる情報は、他の心理検査に比べ、「被検査者の抱いている意識的あるいは無意識な観念・心像を、ロールシャッハ・テストよりも、直接的にわかりやすく伝えてくれ、また SCT より深く象徴的な形で伝えてくれる」(鈴木, 2000) ののである。それは事例に対して「熟練した精神分析家が、精神分析で長い年月をかけた後でも予期できないであろう空想や心理力動を描き出しうる」(Bellak,

1993) ものであったり、「何回もの面接を重ねてきて、多くの情報をつかんだあとにも、それらよりただ一つの TAT 反応の方が雄弁にクライアントのパーソナリティを語っていることはありうる」(鈴木, 2000) と、TAT が事例にもたらしてくる情報の心理療法的有効性とテストの固有性を認めるのである。この点は、「TAT がもたらす情報は日常行動の分析と解釈とに使用される諸原理がそのまま、TAT 物語の整理にも使用される」(Stein, 1955) ものであり、「TAT が心理面接ときわめて近い存在様式であること」(関山, 2013) という考えからも示唆されよう。

(2): クライアント・被検者の心理的変容を促す— クライアント・被検者の枠組み

これは研究者が一番多く認めている点である。クライアントが TAT の体験を通して自己洞察を得ることに焦点が当てられることが多いが、物語を語ることを通してカタルシスを得ること、抑圧された記憶が再生されること等もこれに含まれる (Tomkins, 1947)。

この点について TAT がクライアントにとって一つの創造的な行為であることが関係しよう。TAT は、個人のかかわりの様相 (関係相) (鈴木, 2012) という限定を受けるが、そのかかわり方でもって、現前する絵がどういう状況であるか一つの場面を構成し、物語として検査者に提示する。そこでは、絵の中で喚起された、登場人物の中に内在する欲求、欲動、意味、コンプレックスを絵の状況に合致するように統合することが求められる。それは心の内的状況を刺激し、活性化させる体験となり、同時に物語という形式で統合させることで秩序をもたらしのではないだろうか。その体験が心理的変容を促す契機となり得ると考えられる。

(3): 検査者-被検者のラポールを促進する—相互 の関係性における枠組み

これも多くの研究者が認めている。当然であるが TAT の課題は、検査者 (セラピスト) と被検者 (クライアント) の共同作業で行われる。そこでは語り手と聴き手というかかわりを通して語り

手の物語が共有される。そして共有された物語を橋渡しに、セラピストはクライアントに解釈を、クライアントは TAT の体験を通して賦活された自身の内的体験を打ち明け、両者の情報の共有化は促進されていく。

渡部 (2009) は、TAT の実施をきっかけに、TAT で明らかとされたクライアントの心理的テーマがクライアントとセラピストの間で共有され、それがその後の心理面接においてクライアントの自己開示を促し心理療法を促進することとなったという事例を報告している。この渡部の事例報告に代表されるように、「TAT を利用することで患者や来談者は間接的に自分の問題を表明し、それが本人の抵抗をときほぐし、ラポールが形成されるきっかけとなることがある」(木村, 1964)。

以上、心理療法を促進しうる有効性を三つの観点から簡単に説明した。当然、(1)と(2)と(3)は相互に独立的に機能するわけではなく、相互に深くかかわりあう。(1)と(2)と(3)が相互に上手く機能しうるからこそ、心理療法に有効性をもたらすのである。この点において TAT は他のテストに比べてよい緊張関係をもっているように思われるのである。例えば、TAT が明かす情報はロールシャハ・テストよりも具体的であり、それは被検者自身も自分の作品 (TAT 反応) を味わうことが出来るものである。それは結果として、検査者の反応を分析・解釈を通して得られる情報のみならず、その作品を通じて抱いた被検者自身の所感をも面接で扱うことを容易にさせる。

IV. 積極的適用

次に、TAT を心理療法でどのように使用するかという問題がある。これに対して辻・高石 (1959) は、心理療法の場において通常通りの方法で TAT を実施し分析・解釈行うことを“消極的適用”と呼び、通常の施行にある操作を付加するか、特殊な用い方をしてより積極的に TAT を心理療法に適用しようとするを“積極的適用”と呼んでいる。前節で示したように、心理療法において機能すべくそれぞれの有効性をよりよく引き出そうと様々な工夫が試みられている。

その工夫の大枠は、「自己解釈法」と呼ばれるクライアントが示した反応をクライアント自身に解釈あるいは自由連想をさせる方法である。例えば、先述した Bellak は、クライアントのつくった物語についてのプロトコルを用意し、それについてクライアント自身に自由連想をさせ、そうすることで「患者自身が自ら適切な距離をとることを援助し、心理療法の態度を確立」することを促している。また、草島 (2005) は、学生を対象に TAT を実施し、その後それをきっかけに自己を物語らせるという事例を紹介している。そこでは TAT 物語をきっかけに自己を物語らせることで、「TAT 物語から自然に自分自身を想起させ」協力者は「過去を再構成し、自己の語り直し、自己の変容を促した」と報告している。これらの研究のように自分の反応に対する解釈は、「患者あるいは来談者の防衛的なかまえをとりのぞいて問題をひき出し、つぎにそれを「物語」という客観的なものを通じて、自分自身を理解する手がかりを与える」(木村, 1964) ものとなる。

他方、TAT の心理療法的意義に対し、その説明を自己解釈法に頼ろうとする態度に批判も出来よう。自己解釈とは、すなわちその反応について自分が何がしかを意識化することである。しかし、結果として検討される対象は意識化される範囲に限定され、意識化されないものは対象とされない。また、TAT を心理療法で用いても簡単にクライアントに洞察を与えるものでは決してない。そこでは洞察が引き出されるだけでなく、クライアント自身の抵抗が引き出されることもまた大いにあり得る (辻 & 高石, 1959)。この点において自己解釈法の目的にクライアントの抵抗のあり様を知ろうとするために試みる者もいる。TAT 反応に対するクライアント自身の解釈がクライアント本人にとって洞察足りえたかどうかを検証することは非常に難しいことであるように思われる。

この点と直接関係するか不明であるが、鈴木 (2003) は TAT 図版とは別種の 2 枚の絵を用いて、物語作りのプロセスと物語解きのプロセスを示している。TAT 反応は提示される絵が生成される物語の原因となっているのであるが、語り手に対してなぜ当の物語が生じたのか説明すること

を求めると、語り手は自然かつ無意識的に浮かんできた場面ないしイメージによって絵を説明しようとする。物語の作り手にとっては、言わば物語が絵の原因なのであり、「物語の作り手は、なぜ当の物語が生じたかを正しく説明しえない」と述べている。

語り手が一枚の絵から物語ること、あるいは語り手が与えた TAT 反応から語り手自身が思うこと・感じることは、語り手にとって一つの体験として非常に意義深いことのように思われる。そしてそれは、本人自身の手によって意識化されることもあるが、その領域は氷山の一角であろう。筆者は、TAT 反応を自己解釈することで得た自己洞察が本当に洞察足りうるかという疑問であるし、単純に意識化 (言語化) されえたことのみを心理療法的な意義として捉えることにも疑問を抱く。

心理療法の場において、自己解釈による自己洞察が妥当なものかどうかは、その後の心理面接の場において治療者とクライアントの間で絶えず検証される。また、真に洞察されえなかったものに対しても、それが何故そうであったのかをお互いの間で検証することが、今後の心理療法に対して光明を差すことになり得る可能性を残すため問題はないであろう。しかし心理療法の文脈から切断された調査研究にて、単なる TAT の施行とその体験に対する言語報告から、洞察を得た・得ないと二値的に評価をする研究に対して、筆者はもう少し慎重な態度をとる必要があるように思われる。

少なくとも、洞察に裏打ちされるような無意識的な心理過程への接近するアプローチが必要であろう。現状、そのようなアプローチは少ないと言わざるを得ない。しかし Harmans (1999) や野口 (2010 & 2012) は TAT を語っていくプロセスに心理療法を促進する効果があるものとして捉え、この視点に基づき独自の積極的適用の仕方を提案し、一つの新しい視座を投げかけているように思われる。両者とも、語り手が与えた TAT 反応に対し、主人公とは異なる人物 (第二主人公) の視点で別の異なる物語を語ることで語り手により深い体験を促そうとするというほぼ一致する方

法を提案している点に興味深い。彼らは物語を「変える」という介入を加えることで、物語が「変わる」ことに心理療法的意義を見出している。TAT物語が「変わる」という指標は、心理療法的意義という文脈で扱われる場合、あるいは語り手の体験に根を下ろして考察される場合、もっと注目を集めて研究がなされてよいと筆者は考えている。

V. 終わりに

最後にTATの心理療法的意義について、筆者なりの今後の展望を述べていきたい。筆者（石原，2014）は自分自身の修士論文で、上記に記した問題意識から、同一図版に対するTATの複数回施行し（五枚の図版を一週間おきに五回提示して聞き取る）、協力者の反応内容の変化の推移を検討することで、心理療法的意義に寄与する知見を見出そうとする研究を試みた。結果は、語り手は自分自身のかかわり方に拘束を受けるものの、そのかかわり方の範囲で自分自身の物語を安定化・向上化させていこうとする傾向が優勢して見られたという内容であり、かつその変化の流れそのものが語り手のパーソナリティを推察する良い手がかりとなりうるものであった。語り手は同じ一枚の絵であっても、別の物語を表現しうる“表現可能性”と自身の物語内容を更新していく“変化可能性”を潜在的に有しており、語り手は繰り返し施行する中で、自発的にその可能性を表出して見せることが出来ることを事例で紹介した。語り手の“表現可能性”と“変化可能性”は心理療法の場合で扱う際に有効になりうるという仮説を提唱した。

先に紹介したHarmansや野口が提案する方法は、語り手に潜在する“表現可能性”と“変化可能性”を活性化・表出化する介入の一つであると捉えたと理解が進むように思われる。そしてこのような“表現可能性”や“変化可能性”によって刺激されるのは語り手のかかわりの様相、すなわち「関係相」（鈴木，2012）にはかならない。鈴木は個人が身につけている人や物へのかかわり方を「関係様態」（鈴木，2003）あるいは「関係相」と呼び、実際にある関係様態が用いられる、ある

いは生きられる可能性の高さとなる「ポテンシャルリティ」をTATは明らかにしてくれると考えている。筆者は上記の鈴木への考えに加え、絵を通してある関係相が具体化されていくことでその関係相のポテンシャルリティそのものが活性化・賦活化されていくのではないかとという視点を作業仮説として提唱出来るのではないかと考える。どの関係相のポテンシャルが活性化されるかどうかは、語り手に潜在する能力に左右される。そのため語り手に潜在する能力を見極めて、彼らに効果的となりうる介入法が考案されていくべきであるように思われる。

筆者は、TATが語り手のイメージを引きだし、体験を深めるものとして心理療法に適用されてよいように思われる。Murrayはまさに語り手のイメージをひき出すために絵画を友好的に利用していた印象を強く受ける。絵画を介したセラピストとクライアントのコミュニケーションとしてTATを捉えようとした時、解釈者が語り手の心のあり様を深く捉えうるのみばかりでなく、それを共に分かち合うことで心理療法を大いに促進しうる働きを担いうる有効性があることへと理解を広げることが可能となろう。

事実Photo Therapyの提唱者であるWeiser（1999）は写真をProjectiveなコミュニケーションのツールとして利用しようとしており、実際に写真を効果的に使用すべく多様な介入の仕方を提案している。ただちには言えないが、Weiserの提示する介入法は同じく絵画を媒介とするコミュニケーションとしてTATの図版にも適用可能であると筆者は考える。むしろTATは過去に多様なデータを蓄積しており、TAT図版（特にHarvard図版）は結果として非常に構造化された絵画として捉えることが出来、絵画におけるコミュニケーションが一体どういうメカニズムで働いているのかを理解する一つの道筋を与えてくれるのではないだろうか。つまり、Photo Therapyが提供する視点はTATの心理療法の場合における積極的適用に多様なヒントを与えてくれるものであろうし、反対にTATという構造化された絵画はPhoto Therapyにおける介入法がどのような効果をもたらすのかの理解モデルを提唱する大き

な支えとなるように思われる。

〈付 記〉

本論文は、2013年度札幌学院大学大学院臨床心理学研究科修士論文の一部(TAT研究のレビュー部分)を抜粋し、修正を加えたものである。論文作成にあたりご指導いただきました本学教授の葛西俊治先生、井手正吾先生、本学准教授の橋本忠行先生に深く感謝申し上げます。

文 献

- Bellak, L. (1954) : The Thematic Apperception Test and the Children's Apperception Test in clinical use. New York : Grune & Stratton.
- Bellak, L. (1993) : The Thematic Apperception Test, The Children's Apperception Test, and The Senior Apperception Technique in clinical use. 5th ed. New York : Grune & Stratton.
- Eysench, H. J. (1968) : The scientific study of personality. London : Routledge & K. Paul.
- Gieser, L. & Stein M. I. (1999) : A view to the Future. In : Gieser, L. & Stein M. I. (Eds.), EVOCATIVE IMAGES—THE THEMATIC APPERCEPTION TEST AND THE ART OF PROJECTION. American Psychological Association. pp. 215-221.
- Hermans, H. (1999) : The Thematic Apperception Test and the Multivoiced Nature of the Self. In : Gieser, L. & Stein M. I. (Eds.), EVOCATIVE IMAGES—THE THEMATIC APPERCEPTION TEST AND THE ART OF PROJECTION. American Psychological Association. pp. 207-211.
- Henry, W. E. (1956) : The analysis of fantasy. New York.
- 石原由宇(2014) : TAT 物語の変容性の検討——TATの心理療法的意義に関する一考察. 札幌学院大学大学院臨床心理学研究科修士論文(未公開).
- 木村駿(1964) : TAT 診断法入門 誠信書房.
- 草島弘典(2005) : TAT の使用に関する新たな一提案——自己の物語という視点から. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 4(2), pp. 95-107.
- Murray, C. C. (1999) : Foreword : Harry's Compass In : Gieser, L. & Stein M. I. (Eds.), EVOCATIVE IMAGES—THE THEMATIC APPERCEPTION TEST AND THE ART OF PROJECTION. American Psychological Association. pp-ix- xi.
- Murray, H. A. (1943) : Thematic Apperception Test manual. Cambridge : Harvard University Pres.
- Murray, H. A. (1951) : Uses of the Thematic Apperception Test. Amer. J. Psychiat. , 107, pp. 577-581.
- Murray, H. A. (1967) : The case of Murray. In J. Hillway & L. S. Mansfield (Eds.), A history of psychology in autobiography, pp. 283-310. New York : Appleton-Century-Crofts.
- 野口寿一(2010) : TAT の一変法「第2物語法の試み」 箱庭療法学研究, 23(1), pp. 33-45.
- 野口寿一(2012) : 非内省的なクライアントとの心理療法における TAT の使用 心理臨床学研究, 30(4), 502-512.
- Rosenzweig, S. (1949) : The thematic apperception technique in diagnosis and therapy. Journal of Personality, 16, pp. 437-444.
- 関山徹(2013) : TAT (主題統覚検査) 八尋華那雄監修, 高瀬由嗣&明彦光宜(編)臨床心理学の実践——アセスメント・支援・研究 金子書房, pp. 83-104.
- 下山晴彦(1990) : 「絵物語法」の研究—対象関係仮説の観点から—心理臨床学研究, 7(3), 5-20.
- Shneidman, E. S. & Farberow, N. L. (1958) : TAT heroes of suicidal and non-suicidal subjects. Journal of Projective Techniques, 22, pp. 211-228.
- Stein, M. I. (1955) : The Thematic Apperception Test : an introductory manual for its clinical use with adult males. Cambridge, Mass. : Addison-wesley.
- 鈴木陸夫(1997) : TAT の世界——物語分析の実際 誠信書房.

- 鈴木睦夫(2000)：TAT パーソナリティ——26事例の分析と解釈の提示 誠信書房.
- 鈴木睦夫(2003)：TAT——絵解き試しの人間関係論 誠信書房.
- 鈴木睦夫(2012)：絵解き法(TAT)のすすめ——新たな分析・解釈法の導入 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 12(1). pp.11-159.
- Tomkins, S. S. (1947)：The Thematic Apperception Test. New York : Grune.
- Tomkins, S. S. & Miner, J. B. (1957)：The Tomkins-Horn Picture Arrangement Test Springer Publishing Company. (倉戸ヨシヤ(訳) (1960)トムキンス ホーン絵画整理テスト産業心理研究会).
- 坪内順子(1984)：TAT 診断——生きた人格診断 垣内出版.
- 辻悟 & 高石昇(1959)：精神療法 戸川行男(編) TAT 心理診断双書 中山書店 pp. 276-291.
- 海本理恵子(2005)：TAT (Thematic Apperception Test) に表されるプロットについて——ナラティブの観点から. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 50, pp. 386-398.
- 渡部千代子(2009)：TAT 実施によって自己開示が促進された中年期女性の事例 心理臨床学研究, 27(2), pp. 184-194.
- Weiser, J. (1999)：Phototherapy techniques : exploring the secrets of personal snapshots and family albums. 2nd ed. Photo Therapy Centre Press.
- Wyatt, F. (1947)：The scoring and analysis of the Thematic Apperception Test. Journal of Psychology, 24, pp. 319-330.
- 山本和郎(1992)：TAT かかわり分析——ゆたかな人間理解の方法 東京大学出版会.